2024/1/14　　「 冬の空と聖地の門 」　　ルカ 19:28-38

昨年 １１ 月のハートフルコンサートの日に、ルカ １９ 章から「謙遜な僕」と題して説教を語りました。今朝の箇所はそれ以来の講解説教です。「ガリラヤの春」「エルサレムへの旅」を経て、ここから新しい大きな最後の段落に入ります。主イエスの受難と死、そして復活と栄光が待つ「エルサレムの冬」の場面の始まりです。

凍てつく石の道

「エルサレム入場」と聞けば、イースターの前の週、パームサンデーの箇所としておなじみです。また、主イエスが乗られた「小さなロバ」は、榎本保郎牧師をモデルにした、三浦綾子の「ちいろば物語」を思い出す方も多いでしょう。随分前に、婦人部で深草の「ちいろばカフェ」で交わりをした楽しい記憶も思い出します。

しかし、改めて今朝の箇所を開きながら、馴染み深い温かなイメージの足元にある、冷たく固い現実に心が留まりました。イエス様についていく、という時、一見それは嬉しいピクニックにでも出かけるような響きがあります。しかし、もしそうだと思っていれば、期待外れだったとガッカリするでしょう。小さなロバが、慣れない凍てつく石の道を、コツコツと進むことが、「主がお入り用なのです」という言葉に応じた結果だからです。

私たちは、新しい年の門出をくぐって、既に半月ほどの歩みを進めました。新年の抱負は覚えているでしょうか。計画通りに進んでいるでしょうか。期待していた通りにならない現実に、心が塞ぎがちになる頃かもしれません。今朝の箇所は、そんな信仰の弱い私たちに、力強い励ましを与えています。「イエス様についていくなら、その道が、思ったより冷たく固かったとしても、間違ってはいないのだよ」と。受難と十字架の死は、私たちには到底負うことのできない苦しみですが、それぞれに課せられた務めの先に、同じ復活と救いの喜びが待っています。

天には平和、いと高きところに栄光

神様のご計画は、奇(くす)しく、人間には測り知ることができないと言われます。クリスマスに、「グロリア・インエクセルシスデオ！」と喜びに溢れて賛美した時、私たちは誰一人、元旦に未曾有の大震災が能登半島を襲うなど、考えませんでした。エルサレムの城門で「ホサナ！ホサナ！」と歓声を挙げた群衆は、まさかその一週間後に、救い主が十字架に架けられるなど、弟子たちすら予想していなかったのです。このことは、「私たちが、どう主イエスをお迎えすることができるのか」を問いかけています。この賛美は間違っていたのではありません。むしろ、人知を超えた神の御心を、表しています。私たちには、応答が迫られています。「期待外れだった」と後悔するか、旧約聖書のヨブのように、苦しみながらも、神様との関係をさらに深めていくかです。忠実な僕を、神の愛は最後に、私たちを救うと聖書は約束しています。